

# 高倉川のヤマメとイワナ

丹生高枝教諭 加藤文男

既に大島正満博士（1957）はヤマメとアマゴの明瞭な種的相違点と両種の分布を明らかにした。又同氏（1961）は日本産のイワナを5種2亜種に分類しその分布を示した。それらによれば福井県はヤマメの更に又ニツコウイワナの生息域であり2～3の河川において標本を得られ報告されている。福井県と分水嶺をなす太平洋側の河川であるお隣の岐阜県長良川水系や滋賀県の琵琶湖水系へ福井県から入ると溪流魚のヤマメはアマゴにニツコウイワナはヤマトイワナに変わる事になる。筆者が日野川水系に属する宅良川の一支流高倉川より得たヤマメ、ニツコウイワナの中に疑問点を持つ種があつたが幸に大島博士に鑑定を得た結果やはりヤマメとニツコウイワナであつた。ここに同定を得ました大島博士並びにこの為種々御支援を戴きました武生高枝教諭五十嵐清氏、更に又福井県のアマゴの事について貴重なお話を戴いた敦賀漁業組合長堤中鶴吉氏に深く感謝の意を表する。

## 1. ヤマメについて

大島博士（1957）はヤマメはサクラマス *Oncorhynchus masou* (Brevoort) のアマゴはビワマス *O. rhodurus* Jordan et McGregor の河川型であつてその相違点を次の如く示した。即ち「ヤマメには体側に朱点がなく鱗相は露出部における環線が切断され、アマゴは体側に明瞭な朱点があつて鱗相は露出部における環線が切断されず殆ど周縁までつながつて同心円状に現われる」と云う事である。（図1、2）この中鱗相上の相違点は2年魚以上になるとつきり現われて

くる。大島博士の報文中（1957）の標本は九頭竜川支流の打波川、真名川（道名川と出しているのが真名川の事と思う）、足羽川から得られていて（図3）。今回採捕した宅良川水系は九頭竜川の一支流日野川水系に属し、岐阜

県長良川水系と分水嶺をなしている。五十嵐（1959）は宅良川のヤマメについてその

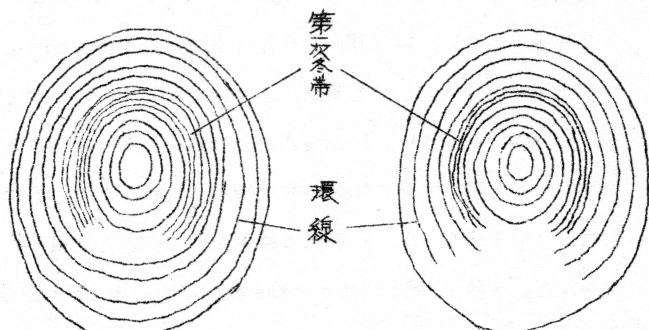


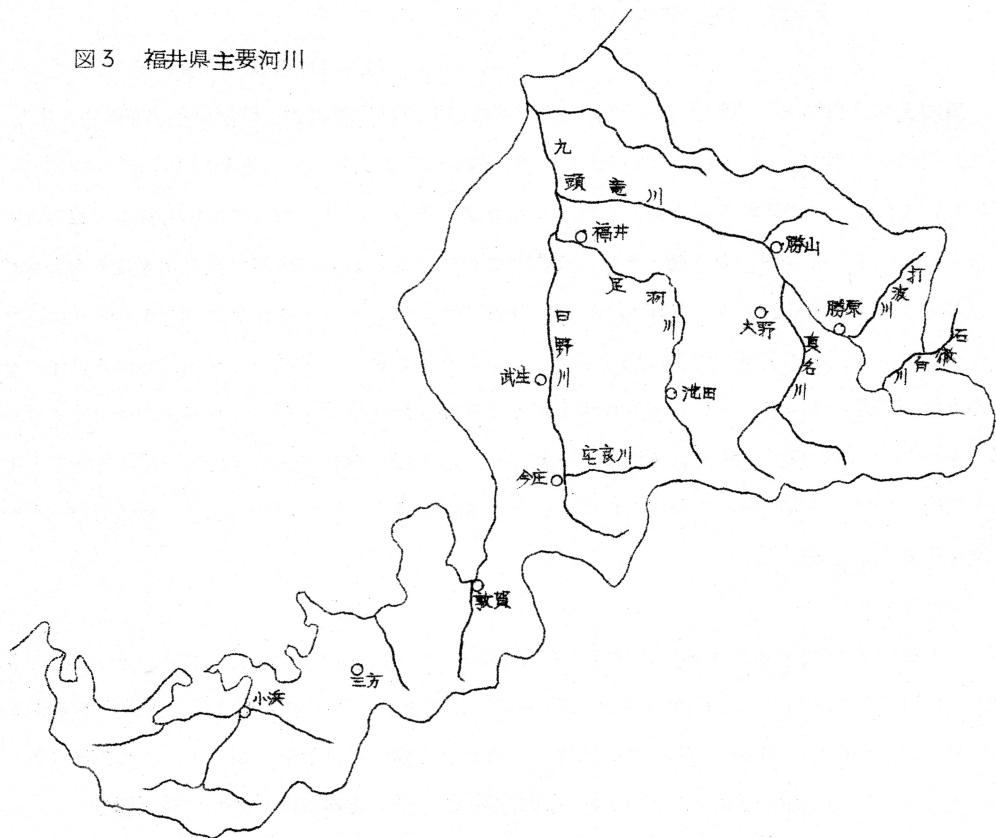
図1 アマゴの鱗相

模式図（2年魚）

図2 ヤマメの鱗相

模式図（2年魚）

図3 福井県主要河川



一支流多留美川から外觀ヤマメで鱗相アマゴ型のものを報告しているが、筆者は多留美川から10尾（2年魚）、高倉川から5尾（2年魚）を得て調査したが残念ながら左様な個体を得る事が出来なかつた。しかし高倉川より得たものの中の1尾（6月採捕、2年魚、体長約13cm、普通の個体より小さい。）が朱点なく外觀全くヤマメでありながらその鱗数の3～4割がアマゴ型の鱗相を示しており（露出部の環線が切断せず鱗の周縁までつながつてゐる。冬帯外の環線数は8～9個あつた。）特異な鱗相を持つ例として疑問に思つたが鑑定の結果やはりヤマメであつた。小林（1955）はサケ科魚類の進化の中で鱗相はアマゴ型の如き露出部の環線が切断されずにつながる型からヤマメ型の如き露出部の環線が切断し消失していける型へ進化するよう示しており、そして鱗の発生に系統発生が見られる事を述べてゐる。このような観点に立つて考えると高倉川で得た鱗相に疑問点を持つヤマメは系統発生の途上におけるある種のケースとも思われる。大島博士（1957）はヤマメとアマゴの雑種に外觀ヤマメで鱗相アマゴ型を示すものを報告されているが、宅良川水系はその一支流高倉川は勿論の事更に宅良川が下流で合

流する日野川水系をも含めてアマゴの生息は全く発見されず従つてそのような雑種が2年魚で生息しているとは考えられない。筆者は2年魚のヤマメでも非常に稀ではあるが何かの原因によつて鱗の露出部の環線が比較的強く現われてアマゴ型の鱗相を示す個体があるのではないかと考えている。そのような個体でも体側に朱点のない点でアマゴと区別出来ると考えている。これらの点については今後の問題としている。現在大島博士(1957)の云われる如く福井県の河川はヤマメが生息しておりアマゴの生息は見られないと考えている。敦賀の黒河川と九頭竜川上流池ヶ島に体側朱点のある所謂アマゴの生息が見られるがこれは人為的なものである。堤中鶴吉氏によれば黒河川のものは今から25年前に奈良県から移入放流せるものであり、九頭竜川上流のものは朝日漁業組合が岐阜県長良川から移入放流したと云う事である。洪水と共にアマゴが流され再び上流へのぼる時付近の枝川へ入る為同一水系の他の支流へ移る事が予想される。この事は黒河川へアマゴを放流した後、その支流である木の芽川、駄口川等に少数見出されるようになつた事から分るようである。勝山の滝波川に稀に見るアマゴはその例かと考える。次に琵琶湖に生息するビワマスの稚魚が放流稚アユと共に来たりその河川に生息するようになつた例もあるようである(大島、1957)。日野川にも琵琶湖産稚アユを放流した事があるよう聞くが現在当河川にアマゴの生息が全く見られぬ所から容易に生息繁殖に至るとは考えられない。最後に福井県ではヤマメの事をアマゴと呼び別種の朱点のあるアマゴと混称しており非常にまぎらわしいので従来のものを正しい和名のヤマメに改めるようここに提言したい。

## 2. イワナについて

イワナ属(*Salvelinus*)のイワナ *S. leucomaenoides pluvialis* (Hilgendorf)は日本に生息する最も普通のイワナである。大島博士(1961)は従来のこのイワナを2種に分類し、鱗の環線が露出部の周縁で2~3個切断されるかされないか、鰓蓋条の数が12か14か第1鰓弓の鰓耙総数が11~15か、15~17か、背びれ起点から側線までの鱗数が40~54か35~38か側線より腹びれ起点に至る鱗数が42~48か36~40かで両者を区別出来るとし、前者をニツコウイワナ *S. pluvialis* (Hilgendorf)、後者をヤマトイワナ *S. japonicus* Oshimaとした(図4)。ニツコウイワナは非常に広く生息する代表的種で関東、上信越、北陸の河川に見られヤマトイワナは相模川以西の太平洋側の河川に見られ琵琶湖水系をも含んでる。両者は体側に橙黄点があり外觀非常によく似ている種である。大島博士(1961)の報文中福井県のものでは九頭竜川源流のものが標本として見られる。今回日野川水系から得られたイワナがニツコウイワナであつた所から福井県の河川は氏の云われるニツコウイワナの生息域である事が更に確められた。筆者が高倉川から得たイワナの中、

2尾(2年魚、いずれも体長約21cm)は体側  
が非常に黒ずんでいて橙黄点が見えず外觀上普  
通に見るニツコウイワナと明らかに異なるもので  
あつたがこの中の1尾を鑑定の結果やはりニツ  
コウイワナであつた。なお体側に鱗孔よりやや  
小さめの白色円点は散在していた。残りの同じ  
もう1尾について筆者が調べた所鱗耙数13、  
鰓蓋条12、鱗相は鱗の露出部において環線が  
切断しておりまぎれもなく氏の云われるニツコ  
ウイワナの特徴を有していた。体色黒ずんだ為  
橙黄点が見えなくなつたとも考えられるが、高  
倉川に橙黄点の見られる普通のニツコウイワナ  
と2型あるように思うが両者の関係は今後の問  
題としたし。なお体色黒ずんで橙黄点の見えな  
い個体は大島博士の云われる黒色型のニツコウイワナとも異なるものと考えている。現在筆者は  
福井県でイワナ類の中ニツコウイワナ以外の種については1尾も得ていない状況である。

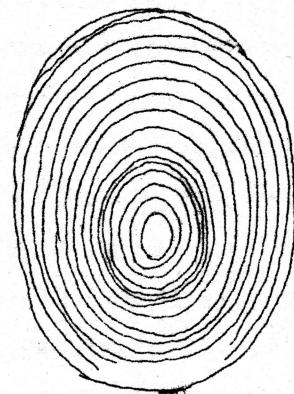


図4 ニツコウイワナの鱗相模式会図  
(2年魚)

## 文 献

1. 大島正満 桜鱒と琵琶鱒 榆書房 '57
2. " 日本産イワナに関する研究 鳥獸集報 '61
3. " 酒匂川に棲息する河川型鱒類に就て Science Report of The Yokosuka City Museum
4. " 天童川上流で採捕されたアマゴとヤマメの間種 動雜 '57
5. KOBAYASHI, H.: Comparative studies of the scales in Japanese freshwater fishes, with special reference to phylogeny and evolution(1)-(11). Jap. Jour Ichthyol., 3-4 (1954 ~55)
6. 宮地伝三郎編 原色日本淡水魚類図鑑 保育社 '63
7. 末広恭雄 魚類学 岩波書店 '60
8. 田中茂穂 日本産魚類図説 風間書房 '52
9. 九十嵐清 鱗相より見た宅良川のヤマメとアマゴについて 福井県博物同好会会報 '59